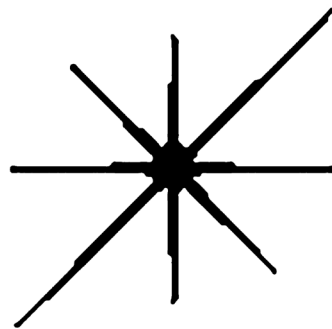


コメット通信 7

['21年2月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 中平卓馬】

『中平卓馬論——来たるべき写真の極限を求めて』をめぐって
江澤健一郎——03

写真には記憶がない
鈴木創士——05

いま、『中平卓馬論』を読んで思うこと
宮本隆司——07

中平卓馬との年月
内田吉彦——10

ヴェルナツキイとソヴィエト・マルクス主義
——『ノースフェーラ——惑星現象としての科学的思考』によせて
市川浩——12

感染症の時代を経験する
——発疹チフス感染記
吉田早悠里——14

伊賀の山奥で
高須次郎——17

【連載】

フーコーの置き土産
——Books in Progress 7
廣瀬覚——18

「わんわん物語」から「わんわん物語」へ
——裸足で散歩 7
西澤栄美子——19

【特集 中平卓馬】

『中平卓馬論——来たるべき写真の極限を求めて』 をめぐって

江澤健一郎

白黒の不鮮明な光のなかで、無人の荒野に人影のない集合住宅が建ち並んでいる。誰もいないその風景は、どこか彼方の映像のようだ。中平卓馬が柚木明の名義で『現代の眼』（1964年12月号）に掲載したこの写真は、彼が初めて公にした写真だが、すでに果てしない極限を告げている。

私にとって、中平卓馬は、来たるべき写真の極限へ向かい続けた写真家、そして批評家であった。だから、彼の写真を見ること、彼の文章を読むことは、その極限へ赴くことを意味する。

写真は、必ず過去のイメージとしてわれわれに現れるが、必然的に来たるべきものだ。撮影者は、撮影した瞬間にはその写真を見ることはできず、写真は撮影後に彼に到来する。中平は、その写真の極限を追求した。彼は、写真家になってから、実現されるべき写真を言葉によって理論的に語りながら、その言葉と競合するように撮影を行い、さらに自分が撮影した写真を再び言葉によって思考する実践を続けていた。

中平の初期の写真は、「アレ・ブレ・ボケ」を特徴としていた。写真という技術が、一般的には被写体の正確な複製像を生み出すとすれば、粒子が荒れてブレてボケたそれらのイメージは、写真の再現機能に抗いながら、写真が写真であることの限界へ向かうようであった。そして、一見、技術的な失敗にも見えるそれらの写真は、写真が撮影主体の制御から逃れながら、むしろ外部から訪れることを可視化していた。もちろん、被写体を選択してシャッターを押すのは撮影者だが、しかし同時に写真は、彼の意図を超えて、彼が出会った世界を過剰に記録してしまう。そして、肉眼による知覚が実は明晰判明ではないのと同様に、それらの写真は世界を不安定で不鮮明な映像に変えていた。さらに、たとえばブレという徴で、カメラを持つ撮影者の行為、彼と世界の関係を記録していた。そのときカメラは、被写体である世界を記録すると同時に、カメラをもって被写体と対峙した写真家の生を不在対象として記録するのだ。

しかし中平は、そのダイナミックな二重の記録を再び理論的に考察しながら、自分自身のアレ・ブレ・ボケ写真を全面的に否定して、根本的な方向転換を宣言する。彼は、著書『なぜ、植物図鑑か——中平卓馬映像論集』（晶文社、1973年）において、さらに来たるべき写真として、あらゆる修飾を払拭した記録写真、「植物図鑑」のような写真を提唱した。植物図鑑の写真は、花言葉のような象徴性とは無縁であり、ただひたすらそのバラがバラであることを提示する。中平は、このような図鑑性をモデルとして、撮影者が抱く既成像を消去して、視覚主体としての自己が抱く遠近法を解体しながら、被写体である事物の視線を写真化することを自己に向かって苛烈に要求した。そして、その事物の視線は、写真家による我有化をはねのけながら、それでも写真家を見つめ、彼と関係を結ぶのであり、図鑑的な写真は、その被写体と撮影者の関係を潜在的に記録していく。さらに、図鑑の図版は必ず複数である。したがって中平は、それらの写真を図鑑的に、つまり等価に併置して、無数の時間と空間を非時系列的に構成しながら、無数の被写体、そしてそれらによって見つめられた自己を複数化してモニタージュすること、そうして写真を集団性へと開き、そこに観者たちを参入させて共同性を創出することを、新たな極限として希求した。そうして彼は、「図鑑」という斬新な概念を創造したのである。

しかし、つねに極限へ向かう彼の探求は、急性アルコール中毒による記憶喪失と言語障害の罹患によって突如として中断される。だが、この中断は再開始に他ならなかった。彼は、自己を忘却しながら自己を新生させる。そして、新たな図鑑写真の構成へと向かった。つねに「来たるべき写真の極限を求めて」。

この中平卓馬という稀有な写真家、そして思想家について、私は一冊の『[中平卓馬論——来たるべき写真の極限を求めて](#)』（水声社）を上梓した。私が彼の存在を知ったのは、約20年前のことだ。それ以来、彼の写真と言葉は、私の思考を揺り動かし、引き裂き、新たに思考し始めることを求める問いであり続けた。彼の逝去から5年が経過した今、われわれは再び彼の写真と向き合い、彼の言葉を辿り、来たるべき思考を築き上げるべきではないだろうか。中平卓馬が残した驚異的な仕事が、多くの人々によって再評価されることを私は願ってやまない。

執筆者について——

江澤健一郎（えざわけんいちろう） 1967年生まれ。現在、立教大学兼任講師。専攻＝フランス文学。小社刊行の主な著書には、『[中平卓馬論——来たるべき写真の極限を求めて](#)』、『[ジョルジュ・パタイユの《不定形》の美学](#)』などが、小社刊行の主な論文には、「[ジョルジュ・パタイユの不定形芸術論——非類似的類似をめぐって](#)」（『水声通信33号』）などがある。

【特集 中平卓馬】

写真には記憶がない

鈴木創士

よく調べ上げたものだと思う。著者が中平卓馬の写真から受けた全般的衝撃は言わずもがなであるが、中平卓馬の記憶喪失とは無関係ではあり得ない衝撃のほうはあえて少しは押し殺すようにやってみたのかどうか、それがもちろんジョルジュ・バタイユという危機の時代の思想家に通暁する著者のとっておきの芸当などではないにしても、著者は冷静沈着に一から写真家中平卓馬の思考の歴史をつぶさにこの本に記した。リアルタイムにその写真に接した年代ではなかったことがかえって幸いしたのかもしれないなどと言ってみたところで、そんなことはどのみち意味がない。

ただ思い返せば、『朝日ジャーナル』や『日本読書新聞』や『映画批評』その他の新聞雑誌で中平卓馬の写真や文章を目にした者たちにとって、フーテン写真家なのか反代々木の評論家なのかを気にかけることはなかったものの、とにかく写真それ自体を注視しなければならないはずの注意力が散漫になっていたことは否めなかった。平和ボケとは正反対であるが、別種の時代ボケがあったのである。私自身のことを言えば、「アレ・ブレ・ボケ」は中平がうろつく新宿のことだろうというくらいにしか思っておらず、事が関わっているのは、写真家の主体であり、また客体を装うかのような写真であり、我々の時代のさなかにあって、それを徹底的に拒否する「写真」であることを、そしてそれを拒否するならそれを撮る写真家自身も拒否され、現身は逆に「写し身」、「写されし身」のなれの果てになるかもしれないことをはっきり分かってはいなかったのだろう。

この本を読みながら、写真を撮ることが、長い間、幾度となく日常の崩壊のさなかにあって、しかも最後まで、それらの誕生と同時に中平卓馬の書く文章の行間に入り込み、見ることの拍動によってそれと見分けがつかなくなり、写真家－思想家としてこれほどまで激越に同一物の永劫回帰を準備していたのだということを私はあらためて理解した。そのような写真家を私は他に知らない。「芸術」はたまた「反芸術」写真などあずかり知らぬ人であっても、我々を隅々まで包囲し尽くし、あまつさえ脳や歴史の記憶のなかにまで入り込んだかのような無数の写真は、映像の襲来が思考をどのように変質させているかを問う間もなく、つねにわれわれにとって時間の虚と実の断片を強制的に写し出す「それ」であることを免れないのだから、誰であれ、写真には興味がありません、写真は見ません、などと断じて言わせてはならないのである。この本を読み終えてまず最初に思ったのはそのことである。

ところで、現在の追想によってのみ過去が再構成されるのだとすれば、撮影の瞬間に写真家が見たものが何であれ、写真に写っているのは我々が想起するような「過去」ではない。写真の存在自体が「過ぎ去った現在」、つまり過去になったとしても、その瞬間に撮られたのは過去の姿ではない。写真に写ったものが過去に属すると思うのは、写真を見ている主体、それに介在するしかない主体の錯覚である。

だが少し待ってほしい。古代ローマの詩人ルクレティウスが言うように、対象から像が剥がれて目に届くのであれば、そしてそれは物理的な事実であるが、我々が目にしている「現在」は、極小のズレしかないとはいえ、厳密な意味で同時的現在ではなくすでにして過去である。それにもかかわらず、

言うまでもなく「現在」なるものはないのだから、この瞬時における「過去」は大まかに我々が「現在」だと見なしているものにどこまでも近似的であって、その意味では写真には現在が写っているのだととりあえずは言うことができる。何京分の一秒前の世界、それが過去とは言えないとすればである。

しかしながら、さらに言えば、この現在は記憶をもたないし、したがって現在はおろか過去が救済されることはない。写真は、それが撮られるたびに、たとえ写った事物や人の背後に過去が控えているとしても、過去それ自体は表面を擦過するだけである。カメラは神の目ではない。写真を撮るのに過去も時間自体もいらぬ。

中平卓馬は1977年に昏倒し記憶喪失となり、一部の言葉を失った。かくしてあらたに見ることを学ぶことが、それによって古くて新しい言葉の地層を獲得することが、彼の写真の方法序説となった。「私は写真家である」または「私は写真を撮る」のではない。「私、写真……」というように主語の位置はあくまで並置され、そのつど写真を撮る「私」によって新たな写真の統辞法が顕れる。このシンタクスによって主観性は主体から撤退する。しかし記憶喪失による幾つもの名前の喪失をよそに、そして中平卓馬が誰であるかをよそに、その撤退を言祝ぐ前に、それでもなお写真を撮る彼の主観的喚起力は如何ともしがたく残存し、それが写真の動かし難い客観性に対峙すべく彼の話法、つまり撮られた写真のなかに紛れ込む。どのようにしてなのか？ 記憶の欠如によってである。昏倒の前も後も、著者が言うように、写真を撮る中平卓馬はそのつど記憶喪失になっていた。どんな写真も記憶をもたないのである。

執筆者について――

鈴木創士（すずきそうし） 1954年生まれ。フランス文学者、作家、ミュージシャン。小社刊行の主な訳書には、エドモン・ジャバス『問いの書』、『ユーケルの書』、『書物への回帰』などがある。

【特集 中平卓馬】

いま、『中平卓馬論』を読んで思うこと

宮本隆司

中平卓馬は、スフィンクスのように謎を掛けてくる存在であった。わたしが写真を始めようとしたときから立ちふさがっているように思えた。中平は、すべてを疑い、すべてを変革するのだという、鋭い問いと否定の言葉を次々と謎のように繰り返していた。あれから半世紀もの年月が過ぎ去ったにもかかわらず、中平が発した問いが、いまもなお生々しく甦るのには驚く。

江澤健一郎が中平卓馬の全表現を考察した論考『中平卓馬論』を出版した。中平が書いた評論を緻密に読み解いて写真作品を分析し、中平の写真表現の概念を明確に浮かび上がらせている。

60年代末から70年代に発表された中平の評論は、かつてのあの反乱の時代を反映して挑発的で厳しいものであった。中平が書き残した、生き急いでいるような気負った文体（江澤は鋭利で魅惑的な文体という）の評論に対する江澤の考察は、冷静であり醒めている。あれから、かなりの年月が経過した。すでに回顧展「原点復帰——横浜」（2003年）や、『見続ける涯に火が……——批評集成1965-1977』出版（2007年）がおこなわれているが、この論考によって、あらためて写真家中平卓馬による思考と写真表現の深淵をたどることになった。

江澤は中平の写真表現を時系列で、〈アレ・ブレ・ボケから自己批判へ〉〈植物図鑑という概念と写真〉〈記憶喪失になること〉と3期（3章）に分ける。各時期の写真表現にはそれぞれ、中平が自己変革してゆく思考と新たな写真概念の構築がみられるという。確かに中平は写真発表と平行して、記憶喪失以前は、その執筆活動で写真に関しての思想を言語化し鋭い発言を繰り返していた。

中平は写真同人誌『プロヴォーク』（1968～69年）の頃に、アレ・ブレ・ボケと形容される、都市が暗く沈み込んだ酸鼻な光景（詩的な光景ともいわれる）を撮影し発表していた。その後、中平の写真表現は著書『なぜ、植物図鑑か』（1973年）に書かれている概念へ自己変革しようとする。写真は撮影者の視線だけがあるのではなく、事物が撮影者にも視線を投げ返してくるのだ、と述べて撮影者と被写体の関係を問題提起した。そして、撮影者の意のままに世界の光景を切り取り造形しようとする写真行為を否定した。

さらに「イメージを捨て、あるがままの世界に向き合うこと、事物を事物として、また私を私としてこの世界内に正当に位置づけることこそわれわれの、この時代の、表現でなければならない」（『なぜ、植物図鑑か』）と述べ、情緒を排して造形操作しない、記録としての写真を主張した。

そのような中平の評論記述を捉えて江澤は、わたしの大型ピンホール写真を参考例として取り上げ、『中平卓馬論』の中で次のように述べている。「そうして彼（宮本隆司—引用者註）は、カメラの内部にいて、光がイメージとして宿のを見つめながら、同時にそのイメージのなかに自らも存在して、被写体となる。そのため、現像された写真の片隅には、黒い影として刻印された彼の姿が記録されているのだ。これは単なる特殊事例ではなく、通常は可視化されない被写体と撮影者の関係性を、可視化した例と言えるだろう。」（第2章〈植物図鑑という概念と写真〉1.事物の視線）

ここで「黒い影として刻印」と書かれているのは、撮影した印画紙に残された黒いシルエットになっている、わたしの身体のことである。小屋のように大きなピンホール・カメラなので、どうしても、わたしが内部に入って印画紙の設置作業をしなければならない。感光材料と画像の光との反応、すなわち写真の露光をカメラ内部で、わたしが見守ることになる。結果として写真の表面に、わたしの身体がシルエットになって残っている。そのシルエットは黒い影になり、見えないものとして見えている。さらにいうならば、見ている身体が見えないものとして見えている、のである。

この状態を江澤の論文の言葉でいうと、「通常は可視化されない被写体と撮影者の関係性を、可視化した例」ということになる。さらに江澤は、「通常のカメラの場合、撮影者は暗箱（カメラ）の外にいるため、写真に顕在的対象として写ることはないが、しかしやはりその写真は、撮影に立ち会う撮影者を潜在的な不在対象として記録しているのである。（中略）写真は、そのような事物の視線を露わにすると同時に、世界と撮影者の関係を問いに付す」と、被写体と撮影者の関係を述べる。

わたしは、そのような意図があってピンホール写真を撮影したわけではない。とはいえ、わたしが小屋のようなカメラの中に入ってピンホール写真撮影している時、ピンホールを通過する微かな外界の光が写す画像を、カメラ内部で待ち構えて見ていたのは確かである。そして、カメラと一体になったわたしの身体が、外界からの事物の視線を浴びていたことも、また事実である。

中平卓馬が、「私は一枚の写真に像の、私が世界はかくあるだろう、かくあらねばならないとするイメージの象徴を求めるのではない。既知のもの、既知の世界ならばそれは叙述可能である。そのさらに向う側に拡がる未知の世界が偶然にも発して来る象徴（中略）を受けとろうと待ち構えることである」（『なぜ、植物図鑑か』）と述べて写真家の姿勢を問うた思索と主張を、この江澤の論文で再認識させられることになった。

中平論に刺激されて関連本を探していたら、中平撮影の表紙と建築写真が載っている1974年の建築雑誌『近代建築』が出てきた。発売時に買ったものだ。この雑誌を入手した頃、わたしは建築雑誌『都市住宅』編集部に入出入りして、写真撮影や編集雑用をやって走りまわっていたから、ほぼ同時期中平と似たような目線で東京の街並みや建築を眺めていたはずである。

そこには〈不可視の構造——丸の内——〉という特集が生まれ、中平が執筆した挑発的な評論「アーキストは建築家になり得るか？」が掲載されている。文中で、磯崎新、ハンス・ホライン、クリストの梱包を列記した上で次のように述べている。

60年代末期のあの学生たちの叛乱と彼らの「破壊のための破壊」も立派に建築家の仕事と考えることができるだろう。それらがすくなくとも〈都市〉にかかわり、〈都市〉をより近くわが身にひきつける行為であったという意味において。だが無念にも都市、建築の破壊は一手早く権力の側から行われているというのが現状である。すでに建設業者と建築解体業者とは手を結んで「列島改造」を進めている。権力の側からの都市の破壊、それに対するわれわれの側からの都市の解体・破壊はいかなる形態をとるべきなのか。そしてその時、建築家に何ができるのか？それが今日の危機的状況を危機的に生きぬこうと決意した建築家に問われるたったひとつの問いなのではないだろうか。
(『近代建築』1974年6月号)

この評論を読んだ記憶は、わたしから消えているのだが、中平がここで述べている意識を共有していたのかもしれない。その後しばらくして、わたしは中平がここで指摘しているような、都市の解体・

破壊の現場を撮影して展覧会「建築の黙示録」（1986年）を開催し、写真集（1988年）を出版することになるのだから。

執筆者について——

宮本隆司（みやもと りゅうじ） 1947年生まれ。写真家。近年の主な展覧会には、「宮本隆司 いまだ見えざるところ」（東京都写真美術館，2019年）などがある。小社刊行の雑誌『[午前四時のブルーⅡ 夜，その明るさ](#)』には，東京スカイツリーを撮影した連作「Tower & Poles」と，対話「Blue SKYTREE in Pinhole Camera——宮本隆司との対話」（対話者＝小林康夫）が掲載されている。

【特集 中平卓馬】

中平卓馬との年月

内田吉彦

最初の出会いは同じ大学の同じ学科に入った1958年。60人定員で30人2クラス編成、毎日専攻科目の授業があり、共に浪人経験者の2人が親しく言葉を交わすのに時間はかからなかった。

中平の家は東京世田谷、私は大宮市。当時北区西ヶ原にあった大学にそれぞれ自宅通学していたが、家から離れたという願望が互いにあり、ある時から大学近くの同じ下宿で暮らし始めた。賄い付きのその下宿には同級生で名古屋出身のTが既に入居しており、造幣局に勤める主人夫婦と娘の3人家族が下に住む2階3部屋を占拠する形になった。

当時日本は日米安保条約改定を巡る激しい政治状況下であり、学生運動も過熱した。下宿の玄関先には赤旗が常備されるようになり、大学自治会が組織する国会周辺のデモに連日のように参加した。大学教職員の隊列にも出会うほど、運動は全国的な広がりを見せていた。学科を超えた先輩達の話を書く機会も増え、否応なく考えさせられたのが自分と社会、国家、世界との関わりである。

就職の時期を迎えると、同級生のほとんどが高度経済成長下の優良企業に生業を求めたが、中平は違った。意図的に卒論を提出せず留年し、1年後ある小企業に入った。私は彼の工場が造ったトランジスタラジオを賤別にもらい、その年の5月羽田から旅立った（成田はまだ開港されていなかった）。

1年半後帰国すると、中平は月刊誌『現代の眼』（現代評論社）編集部にいた。新聞広告の求人に応募し、転職したとのこと。総合誌に在籍したのは2年ほどで、日本橋にあった編集部に何度か中平を訪ねたことがある。ある日中平に呼び出され、現代評論社を辞め、写真家になることを父親（中平南溪・書家）に伝え、説得する場に立ち会うよう求められた。

そして旧赤坂プリンスホテルの喫茶室で、編集の仕事で知り合った寺山修司、東松照明らの勧めもあり、写真家を志すに至った経緯を父に告げる彼の並々ならぬ決意を聴いた。高知県の農家の長男に生まれながら書家を志して上京した父親の血を中平は受け継いでいたのだろう。

結婚したのも早く、式を赤坂の神前で言い、銀座並木通りの「イタリー亭」で寺山、東松両氏を招き披露パーティーをするというので、私はその司会役をつとめた。戦時中葉山に疎開していたこともあり、中平は逗子に家を借りていた。私も結婚すると逗子のアパートに移った。フリーの写真家となった中平の生活は厳しく、一人息子の幼稚園の月謝が払えない時があった。金策は妻の役目で、中平の実家に泣きつくことが多かった。中平には衝動的なところがあり、引越しをするというので手伝いに行くと、本人は東京にいて帰れないと言ってきた。ある年は逗子市長選に立候補すると言い出し、本人は大真面目で、説得にかかると、露骨に不快な顔をした。

その気質は気分転換をする絶妙な機転ともなった。大学の夏休み、彦根の同級生宅に泊まり祇園祭を見て帰るつもりが、高知県の宿毛へ行こうと言い出し、一週間ほど彼の父親の実家で過ごした。同級生4人連れだったが、途中2人が帰路につき、中平と2人、さらに新潟県まで北上、能海岸の民宿で金が尽きた。半月の旅で宿賃を払ったのは高松の窓のない安宿と能の民宿だけで、あとは知人宅、車中泊、駅のベンチなど。直江津では駅前のベンチで朝目を覚ますと警官が我々をのぞき込んでいた。結婚前のことだが、ふいに山を見たいというので上越線の夜汽車に乗り、早朝の土合駅で下車、薄明の谷川岳に見惚れた。また海に行きたいというので大洗に出かけ、帰りの汽車がなくなって野中の連

れ込み宿のようなところで一夜を過ごしたこともある。

写真の撮影、著作の仕事が忙しくなると、仕事から休息へ、昼から夜へ、日常から非日常へ移行するために、中平は酒を痛飲するようになった。酒が好きだったのではなく、精神の開放を求めたのである。それまでの自己の営為を否定するような写真論の主張など、中平にとってかなりの重圧だったに違いない。

1977年9月、篠山紀信との共著『決闘写真論』の出版祝と、花火を学ぶため中平が借りていた家のプレハブの離れにひと夏滞在したフランス人（リセの美術教師で71年パリ青年ビエンナーレでの友人）の送別会を兼ね、朝日新聞、日本読書新聞関係者など7、8人が逗子の中平宅に集まり、飲み会となった。中平はいつものように飲み、一度吐いたあと、また飲んだ。意識を失い、記憶を喪失する、その前夜のことである。

病後、車の助手席に乗せて様々な場所へ案内しながら、赤信号やトンネルに差し掛かると、青に変わり出口が見えてくるまで息を詰めたまま、中平なりに何かを信じている表情を間近に見たり、毎年開かれていた大学同期会にも度々同行して、旧友たちの話に無理に相槌を打ったりする様子を垣間見た経験から、中平にとっての後半生は失った言葉を取り戻すための死闘だったように思われてならない。

執筆者について――

内田吉彦（うちだよしひこ） 1937年生まれ。フェリス女学院大学名誉教授。専攻＝スペイン、ラテンアメリカ文学。小社刊行の主な訳書には、マリーナ・ベレサグア『[リトル・ボーイ](#)』、ボルヘス＋ビオイ＝カサレス『天国・地獄百科』（共訳）などがある。

ヴェルナツキイとソヴィエト・マルクス主義

—『ノースフェーラ——惑星現象としての科学的思考』によせて

市川浩

ヴラジーミル・イヴァーノヴィチ・ヴェルナツキイ（1863-1945）は地質学者・鉱物学者・結晶学者としてキャリアをスタートさせながら、化学の視点から地球をトータルに解明する新領域「地球化学」を開拓し、さらにそれに安住せず、60歳を過ぎて、地上の生物を地質学的な力のひとつと見る「生物圏（biosphere）」の思想に至り、これを対象とする総合的な科学、「生物地球化学」を提唱した。「生物圏」の思想はさらに、人間の科学的知識にもとづく科学の営みを能動的な地質学的要因としてとくに重視した「叡知圏（noosphere）」の思想へと発展した。理性への信頼が揺らぐ20世紀中葉にあって、ヴェルナツキイは科学の発達による人類の未来への希望を高らかにうたいあげた。「われわれは叡知圏に入ろうとしている [……] 未来はわれわれの手の中にある。われわれはそれを離さない」（ヴラジーミル・ヴェルナツキイ／梶雅範訳『ノースフェーラ——惑星現象としての科学的思考』《叢書・20世紀ロシア文化史再考》水声社、2017年、361、362頁。以下同書からの引用は頁番号のみ示す）。この気宇壮大な思想を展開した著作は、しかし、長く著者によるメモ書き程度の、難解で、ある種乱雑、文法的にも読み取りにくい草稿として留め置かれたままであった。彼の思想が脚光を浴びるのは1980年代、ソ連社会主義が反省期に入った「ペレストロイカ」期においてであった。ソ連解体直後の1992年には包括的で膨大な『ヴェルナツキイ叢書』の刊行がはじまる。

筆者は1990年代末からコンスタントにロシアでの現地資料調査を続けているが、2010年頃までは、学術書を扱う書店ならどこでもヴェルナツキイの著作やヴェルナツキイの伝記、解説書、研究書が数多く並んでいた。なぜ、ロシアではこれほどヴェルナツキイが注目を浴び、その著作が重視されたのであろうか。唯一正統な教義として公共言論空間のナラティブを上から規定し、ソ連邦、およびその他の社会主義国の精神生活に君臨し続けたソヴィエト流のマルクス主義が、ロシアの知識層や幅広い国民から信用を失い、さりとて新しい包括的な世界観や国づくりの理念がまだ見えなかった時期（今も見えているわけではなかろうが）に、壮大な構想をもつヴェルナツキイの思想は、その難解さにもかかわらず、マルクス主義のカウンター・アイディア（対抗理念）として注目を集めたのであった。また、標記の著作の翻訳者、梶雅範によると、ヴェルナツキイがさまざまな偶然からロシアにとどまり、ロシアで亡くなったことに共感するロシア人が多いという。彼はソ連の過酷な現代史を、数多くのロシアのひとつとともに確かに生きたのであった。

ヴェルナツキイの壮大な思想体系からすれば、そのほんの一部に過ぎないとはいえ、ここでは、彼の日常の思想的営みのなかでとくに深刻な問題であったであろうソヴィエト・マルクス主義との関わりを取り上げてみたい。ヴェルナツキイはソヴィエト・マルクス主義に実に手厳しい。「弁証法的唯物論が国家哲学となり、国家権力の強力な支持を得、その自由な批判や他のあらゆる哲学概念の自由な発展が、考えることさえできず事実上不可能」で、「公認の弁証法的唯物論 [……] 自身もそうした自由がない」（279頁）。そのようなソ連社会の知的生活のありかたにたいする批判は当然としても、彼は「ロシアの土壌で、亡命者の中で生まれ、歴史的に無意識のうちに国家的な思想現象に成長した」（280頁）弁証法的唯物論が、「哲学的にはまだ体系的に十分に突き詰められていず、不明な点や洗練されていない点が多々ある」（279頁）未完成の思想体系であると断じている。では、こういった点

から見て未完成なのであろうか。彼は、マルクスの『資本論』も「彼らの生前すでに、だいたいにおいて科学的方法論と科学的探究の双方に応えるものではなくなっていた」(282頁)とする。つまり、弁証法的唯物論が(しばしば)科学から遅れをとっている点をとらえているのである。さらに、「他の形態の唯物論とも異なって、弁証法的唯物論はそれらと根本的な不一致があり、その起源やその議論の根本でヘーゲルの形態の観念論と密接に結びついている」(284頁)として、観念論との訣別の不徹底により、「あまりにヘーゲル哲学全体と緊密に結び付き過ぎていて、それを通じて唯物論の精神環境に、唯物論とは異質の構造が入り込む」(285頁)とも論じている。注意すべきは、彼がむしろ、唯物論の〈徹底〉を訴えていることである。彼は、「唯物論哲学が、現代の他の哲学潮流と大きく異なるのは(この点にその強みがあるのだが)、科学と衝突することがなく、かつ、あり得る限り完全な形でその成果に基づいていることによる」(284頁)として唯物論の〈徹底〉に期待する。唯物論を〈徹底〉させるためには「科学の哲学に対する優位を常に認めることである」(285頁)。また、「彼ら[マルクス、エンゲルス、レーニン]に特徴的だったのは、その科学的知識と科学的関心の幅の広さであり、それは政治家としては異例なことであった」(281頁)と弁証法的唯物論の創始者たちの科学的知見の豊富さに敬意を払ってもいるが、彼が我慢ならないのは、やはり、「彼らにとって哲学思想が科学思想よりも上にあること」(281頁)にほかならなかった。マルクス主義の側からこれを見れば、ヴェルナツキイは非弁証法的な(機械論的な)唯物論者で科学至上主義に陥っている、ということになるのであろう。

こうして見ると、ヴェルナツキイを論じることは、カテゴリー的にソヴィエト・マルクス主義を論じることにつながる。支配イデオロギーとしてのソヴィエト・マルクス主義にたいしてひとびとが採りえた態度にはどのようなものがあったであろうか。近年、ソヴィエト科学史などでよく目にする研究テーマである。ソ連社会におけるイデオロギー的な言論空間の中でソヴィエト・マルクス主義にかなり確信的な信念を持ち、スターリン期を〈勝者〉として生き、今日でもその仕事が評価されている知識人もいるであろう。また、ソヴィエト・マルクス主義の厳格なようであり、多義的で柔軟な構造、あるいは、イデオロギー監視機構の知的レベルの低さに助けられて、自己の利害とステータスを守ることに成功した知識人もいたであろう。あるいは、権力中枢に庇護者を見出し、自分たちに都合よく教義やその解釈を変更することに成功した知識人もいたであろう(サイバネティクスの場合のように)。またあるいは、公共言論空間では沈黙を守り、ひたすら自宅書齋の〈机の中へ(в стол)〉、〈政治的遺書〉となるやもしれぬ文章を忍ばせつつ、辛くもスターリン期を生き延びた知識人もいたであろう。ヴェルナツキイもそうしたひとりであった。ソヴィエト・マルクス主義が弾圧の思想として歴史的に断罪され、「死せる犬」となって久しい。しかし、かつての秘密資料が公開され、文書館資料・記録にもとづくソ連社会の研究が進むにつれて、ソ連社会を生き延びた知識人や民衆の生そのものが可視化されるなかで、それらの生を辿ることで、この「死せる犬」の、意外に多様で豊富なその真の姿が明らかにされつつあることだけは申し上げておこう。

執筆者について――

市川浩(いちかわひろし) 1957年生まれ。広島大学教授。専攻=科学・技術史。主な編著書には、『科学の参謀本部――ロシア/ソ連邦科学アカデミーに関する国際共同研究』(北海道大学出版会、2016年)などがある。

感染症の時代を経験する

——発疹チフス感染記

吉田早悠里

私は、2005年からエチオピア南西部で文化人類学のフィールドワークを継続的に行っている。私のエチオピアでの初めての単独フィールドワークは、2005年1月から3月までの3カ月間で、電気は通っておらず、ガスも水道もない農村部に位置する村で行った。村には、ホテルなどない。そのため、必然的に現地の人々の家に居候させてもらうか、部屋を借りるかのどちらかになる。私は、現地の人々に家族として迎え入れてもらい、彼らの家に身を寄せて、共に同じものを食して生活していた。



エチオピア南西部カファ県の風景。カファ県は「コーヒー発祥の地」として知られる。



モロコシを脱穀する村の住民。モロコシは、人々の主食インジェラやパンになる。（いずれも筆者撮影）

2005年3月末、私は3カ月間のフィールドワークを終えて帰国するため、村からバスを乗り継いで首都アディスアベバに移動していた。バスのなかで、熱っぽさを覚えると同時に、鈍い頭痛がはじまった。慣れない環境での調査による緊張と疲れの反動が出たのであろうと思った。しかし、移動2日目も頭痛と発熱は治まらず、アディスアベバに到着した時には、40度近くの高熱と頭痛、悪寒、関節痛に苦しむようになっていた。翌日、私がアディスアベバでお世話になっていたエチオピア人の家族が、私を小さな医院へ連れて行ってくれた。その医院では、ロシアに留学していたという医師が

風邪だろうとって解熱鎮痛薬を処方してくれた。しかし、快方の気配は全くなかった。発熱と頭痛が始まってから4日目、私はエチオピア人の家族の勧めで在エチオピア日本国大使館の医務官に診察していただくことにした。大使館に到着したものの、私はフラフラで椅子に座ることもままならなかった。医務官の先生が私の血圧を測ると、驚くほど低かった。すぐさま、大使館の車で現地の私立総合病院へ連れて行っていただき、検査をすることになった。病院での血液検査の結果、私は発疹チフスを発症しており、その場で入院することになった。私の意識が朦朧としている間、医務官の先生が海外旅行保険会社に電話をし、全ての手配を整えて下さった。

当時、私は発疹チフスという病名を聞いたことがなかった。医務官の先生は「タイフォイド (Typhoid, 腸チフス) じゃなくてタイフス (Typhus, 発疹チフス) だし、心配しなくても大丈夫だよ」と爽やかな笑顔でおっしゃった。加えて、入院初日には病院の料理長が私の病室に挨拶にやって来て、満面の笑みを浮かべて「何でも食べたいものを作るので、リクエストをどうぞ」と言った。残念ながら、私は料理長が作ってくれた食事を楽しめるような体調ではなく、点滴と投薬を受けるばかりであったが、約1週間の入院を経て快癒し、無事に退院、帰国したのであった。

発疹チフスとは、病原体リケッチア (*Rickettsia prowazekii*) に感染したコロモジラミに吸血されて感染し、発症する感染症である。戦争や紛争、貧困、飢餓など、人の密集した非衛生的な環境で感染が容易に広がるとされる。ヨーロッパでは、ナポレオンのロシア遠征時や、第一次大戦中に大流行したほか、ナチス・ドイツの強制収容所でも多くのユダヤ人が命を落とした。日本では、第二次世界大戦後に流行したものの、DDTなどを用いた対策によって減少し、1957年の1例を除いて発生はみられていないという。現在は、感染症法における四類感染症に指定されている。発疹チフスの症状は、私が経験した頭痛、発熱、悪寒、関節痛、疲労感などのほか、重篤な場合は意識障害や幻覚などの症状が出る場合や、治療しなければ死に至ることもある。

私はどのように発疹チフスに感染したのだろうか。心当たりは、いくつもあった。おそらく、調査拠点としていた村を離れて近隣の集落に数日間の宿泊を伴う短期調査に出かけた時に、宿泊させてもらった家で大量のコロモジラミに刺咬されたことが原因であろう。その家では、夜、持参した寝袋に入って床に就いたものの、走り回るネズミと、身体の痒みのために、あまり眠れなかった。翌朝起きてみると、寝袋のなかにノミやダニ、そしてコロモジラミが入り込んでおり、足や腕、お腹周りを刺されていた。その家で提供された干し草でつくったベッドマットに、ノミやダニ、コロモジラミが棲んでおり、夜中に私の寝袋のなかに入り込んでいたのであった。さらに、その時、私は拠点としていた村でお世話になっていた家に荷物を置かせてもらって、寝袋のほかに、着替え数着と寝間着、調査機材一式など、リュックサックひとつにまとまる最低限の荷物しか持っていなかった。わずかな着替えしか持っていかなかったため、衣服に付いたダニやコロモジラミを取って殺した後に、その衣類を洗うことなく数日間着続けていたことも良くなかったのだろう。私が発見しそこねたコロモジラミが、衣服に卵を産み付けて増殖していたことが多々あった。そして、コロモジラミにせよ、ダニにせよ、刺された部位は猛烈に痒かった。刺された部位を掻いてしまったことで傷ができて、感染が進んだのである。要するに、私が衣服の洗濯を怠らず、コロモジラミに刺されないように予防策を講じていれば、発疹チフスに感染して発症することは防げたはずであった。

帰国してから、発疹チフスに感染した経験を話すと、世代によって反応が異なった。私と世代の近い1970年代以降に生まれた人々の反応は「そんな病名、初めて聞いた」という鈍いものであった。一方で、第二次世界大戦前から1950年頃までに生まれた人々からは、「え！？ 危険な病気じゃないか」と驚かれることが多かった。なかには、第二次世界大戦直後に親戚が発疹チフスで亡くなったと

語る人物もいた。近年、私がもうひとつの調査地としているオーストリアの首都ウィーンでお世話になっている夫妻にこの経験を話した時も、特に1936年生まれ的女性は顔色を変えて「発疹チフスなんて恐ろしい病気に感染したなんて！ あなた、その話、洒落にならないわよ」と深刻な声で言った。

今日の日本では、実際にコロモジラミを目にする機会などほぼない。そのため、現代の日本に生きる多くの人々にとって、発疹チフスは遠い過去の話であるか、チェーホフの短編『チフス』に代表される文学作品のなかの話、あるいは遠く離れた発展途上国の話として感じられるかもしれない。そうしたなかで、第二次世界大戦と戦後直後を知る世代の人々が、私の発疹チフスの発症の経験に強い反応を示したのは、かつて日本でもヨーロッパでも発疹チフスが流行し、多くの死者を出した時代を自らの経験として知っているからであろう。

ちなみに、今日のエチオピアの農村部に暮らす人々にとっても、発疹チフスはあまり馴染みのない感染症である。現地の人が病気になったとって語る病名は、「マラリア」か「タイフォイド(腸チフス)」であり、「チフス(発疹チフス)」に関しては一度も聞いたことがない。なぜ、現地の人々の間で発疹チフスに感染して発症したという話がないのだろうか。農村部には検査機器がなく、正確な診断が困難なために、発疹チフスを発症した人を把握できていないだけなのだろうか。謎である。

執筆者について――

吉田早悠里(よしださゆり) 1982年生まれ。名古屋大学准教授。専攻＝文化人類学。小社刊行の訳書には、ジェームズ・ファーガソン『[反政治機械――レソトにおける「開発」・脱政治化・官僚支配](#)』(共訳)がある。

伊賀の山奥で

高須次郎

去年の暮れ、三重県伊賀の山奥の旅館に夕方に着いた。GoTo トラベルが中止になったのに、私も不良老人夫婦は予約もしていたので不要不急の旅に出かけてしまった。部屋に落ち着くと天気予報やニュースの時間である。テレビを点けると画面が出て来たと思ったら、すぐに乱れて左右に走査線が流れる。しばらくすると画面が歪んだり。チャンネルを回しても同じような具合だ。このテレビの調子が悪いのかと思って、画面を修正しようとしたが、うまくいかない。チャンネルボタンをばちばちやって他のチャンネルを点けるとみえる局もある。あれこれは関西テレビだ。こっちは中京テレビだ。時々画面がおかしくなる。さっきのはNHK津放送局だ。県境だからかと思ったが、まあ、しょうがない、ここまで来てテレビもないな、と思い直し温泉にいった。客は2組だったので男湯、女湯はそれぞれの貸し切りだった。

翌朝、ご主人に「部屋のテレビの調子が悪いようですね」と言うと、「すまへん。テレビのせいではなく、電波の具合なんです。ここは山間部だから難視聴地域で……。以前は東海と関西のテレビの両方が見えたんですけど、あれからはだめになったんです」と言う。「あれからって?」「ほら、デジタルになったでしょ」「ああ、地上デジタルテレビ放送が始まってからですか」「そうです」

地上デジタルテレビ放送は2003年に三大都市圏ではじまり、12年には東京スカイツリーが完成し、全国的にデジタル放送に移行し、アナログ放送は終了した。

デジタル化で問題になったのは、デジタル波だと遮蔽物の裏側では電波が届きにくく、テレビが見にくくなることだった。ビルの裏側、谷間、山の背後などだ。地デジが東京スカイツリーに移行したのも、東京タワーだと低いため、電波が遠くまで届かず、ビルの谷間の難視聴地域が広がるからという。

アナログ放送終了にともない、難視聴世帯は約27.5万世帯にのぼり、山に囲まれた鎌倉市でも難視聴世帯が続出したそう。総務省は、アナログ受信者のためのデジアナ変換対策やケーブルテレビへの転換などの暫定的難視聴対策をすすめた。しかしケーブルは有料だし共同アンテナも費用がかかる。そうこうするうちに総務省は2015年4月末を持ってデジタル難視聴対策を終了してしまった。

対策が万全なら、こんなことは起きないはずだ。ところがいまでも「地デジ難民」は確実にいる。たとえば奈良県南部の山間部など。私が泊まったところは山一つ越えれば奈良県で室生寺がある。他にもまだまだあるという。

宿の主人は続ける。「テレビが見えなくてもNHKはちゃんと受信料を取るんですねん」「えっ」と私のかみさん。「しかも部屋ごとに。組合で掛け合っただけなんですけど、あきまへん……」。「地デジ難民」はいないことになっているからか。消去されてしまうのか。今の世の中、なんとこの手の消去、切り捨てが多いことか。聞いていて、自分たちの自粛破りは柵に上げて、改めてNHKや国の身勝手さに腹立たしい気分になった。

執筆者について――

高須次郎（たかすじろう） 1947年生まれ。緑風出版社長。主な著書に、『出版の崩壊とアマゾン』（2018年）、『再販／グーグル問題と流対協』（2011年、いずれも論創社）などがある。

【連載】

フーコーの置き土産

—Books in Progress 7

廣瀬覚

昨年末、ミシェル・フーコー『肉の告白』（新潮社）がようやく日本語で手に取れるようになった。本人の意向により、ついぞ読むことのできぬ幻の書物と思われていた『性の歴史』の最終巻が、2018年、権利継承者の判断により公刊されて以来、本書への期待の高まりは、ここ数年、堰を切ったように出版された関連書籍からも窺われる。入門書から専門書まで興味深い書籍が続々と刊行され、なにより、既訳が立て続けに新装復刊されたのはまだ記憶に新しい。

しかし、である。——「実際、回帰がなされるためには、まず忘却が、偶発的な忘却ではなく、なんらかの無理解による覆い隠しでもなく、本質的で構成的な忘却がなければならない」と、フーコーは言っていた。マルクスやフロイトを念頭に置いたこの言葉を、フーコーその人に重ねあわせることによってフーコーへの回帰を説く、小林康夫先生の次の言葉に、私ははっとさせられたのである。「われわれはまだ、彼の肉体を忘れることができないのだ。[……] なによりも、フーコーを忘れなければならないのかもしれない。」（『《人間》への過激な問いかけ』）。フーコーの早すぎる死からわずか六年後の1990年末、時代を画する知性のアウラをしかと受け取った、同時代に生きるもう一人の知性によって記された言葉である。

ただ、フーコーの没後に生まれた私のような世代にとって、かの思想家のアウラに直に触れることなど叶わない。けれども、その思想は、現代を生き、考えるためにはますます（いや、きつとずっと前から）重要なのだと肌で感じている（ワクチンの接種も始まった）。となれば、その著作にあたるほかないのだが、とはいえ、著作毎に変貌を遂げ、あれほど入り組んだフーコーの思索にどのようにして向かえばよいのだろうか。

幸いにも、私たちにはフーコーが物した著作のみならず、13年にもわたって講じられた『コレージュ・ド・フランス講義録』があるではないか！ 2015年に全13巻が完結したいま、この講義録を総体的に振り返ってみれば、それは著作の準備段階ではなく、著作とは独立した主題や概念に着手し、時にそれを磨き、時にそれを放りもする、フーコーの思考のうねりが見られるのである。このいまだ精査されたとは言いがたい巨大なコーパスへ進むための最良の手引として、佐藤嘉幸・立木康介両先生の編集の下、気鋭のフーコー研究者から、D. ドゥフェール、E. パリバル、J. バトラーといった著名な研究者までが集った『ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む』を間もなくお届けする。本書によって、膨大な史料を渉猟した末にフーコーが講義の端々に置いてきたものを、私たちはようやく手に取ることができるのである。

執筆者について——

廣瀬覚（ひろせさとる） 1991年生まれ。水声社編集部所属。

【連載】

「わんわん物語」から「わんわん物語」へ

——裸足で散歩 7

西澤栄美子

ディズニーの長編アニメーションは、近年の『アナと雪の女王』1 (2013) と2 (2020) を経て、多くの子供たちの人気の的となっています。ディズニーのプリンセス・シリーズにして、〈ディズニールネッサンス〉の先駆けとなったのが、『リトル・マーメイド』(1989) であることは、良く知られています。アンデルセン原作の『人魚姫』の悲劇は、ハッピーエンドとなり、ヒロインのアニエスは、明るく聡明で、アンダー・ザ・シーの世界から、未知の地上への好奇心と冒険心を持つ女性として描かれています。そうしたヒロインは、『美女と野獣』(1991) のベル、『アラジン』(1992) のジャスミンへと受け継がれ、「アナ雪」姉妹の〈シスターフッド〉へと進化しています⁽¹⁾。

ディズニー・アニメのもう一つの大きな支柱は、動物シリーズです。『わんわん物語』(1955) は、筆者が幼稚園児の時に封切られ、筆者にとっては現代の子供たちにとっての「アナ雪」に負けないくらいのマイブームとなりました。原題は“Lady and Tramp”で、(1950年代の東宝青春映画風に)「お嬢さんと風来坊」とも訳せます。ヒロインの〈レディ〉は美しいコッカー・スパニエル犬で、その世間知らずでいながら、主張もし、ちょっと気の強い性格、その表情の豊かさやチャーミングな仕草は、今見返しても魅力的です。彼女のキャラクターは、1950年代当時の、アメリカ合衆国の中産階級の若い白人女性の理想像であったと感じます。一方のトランプは、どうやらイタリア系アメリカ人のコミュニティに属すると思える野犬で、勇敢で、腕っぶしが強く、利発な自由犬である一方、浮気なお調子ものであり、レディや仲間の窮地を救うヒーローです。とかくプリンセスものの王子の影の薄さに比べると、彼はやはりこの時代の理想の男性像のひとつのパターンでもあるでしょう。

2019年にその実写版が、『わんわん物語』として制作され、ディズニー・チャンネルで配信されました。トランプはともかく、レディや彼女の友人の犬たち⁽²⁾のビジュアルの再現性は高いものの、1955年のアニメ版との決定的な違いは、レディの飼い主の裕福なディア家の若い夫妻の妻、ダーリングがアフリカ系の女性であり、悪役(?)のセーラおばさんもアフリカ系であることです。このアニメの舞台となっている時代は、服装、街並み、乗り物などから、『若草のころ』(1944)の舞台である1900年代初頭⁽³⁾と思われる。あえてこの時代設定において、アフリカ系の女性を人間社会での主人公としたことは、果敢な挑戦と思いますが、実写版がこうした〈ユートピア〉を設定したことに違和感を禁じえません。そもそも、「ライオンキング」をはじめとする、動物ものの実写版に、どんな意義があるのでしょうか?⁽⁴⁾

(1) ディズニー・アニメには近年さまざまなジャンルがあり、『ポカホンタス』1 (1994), 2 (1998), 『ムーラン』(1998), 『モアナと伝説の海』(2016) など、アメリカにおいては、マイノリティーの女性たちを主人公にした作品群もあります。

(2) レディの住むディア家の隣の愛犬、スコッチテリアのジョックは、スコットランド訛りとその血統を誇りにし、タータンチェックの服を纏った雄の老犬(?)でしたが、実写版では雌犬となっています。スコットランド人に対するステレオタイプの思い込みを避けるための配慮でしょうか?

- (3) ビンセント・ミネリ監督，ジュディー・ガーランド主演，天才子役マーガレット・オブライエン助演のこの映画は，1903-1904年のセントルイス万博直前のアメリカの中流家庭（筆者から見れば，中流家庭といっても，ディア家同様，大変裕福な家庭に思えます）を舞台にしたミュージカルです。原題は“Meet Me in St.Louis”。
- (4) 主人公ライオンのシンバの性器は消されていますし，そもそもCGを駆使しての「実写」であることや，動物福祉の面からも疑問があります。

執筆者について――

西澤栄美子（にしざわえみこ） 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻＝美学，フランス文学。小社刊行の主な著書には、『書物の迷宮』，主な訳書には，クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』（共訳），同『映画における意味作用に関する試論』（共訳）などがある。